

安楽寺だより

第41号

紙面内容

- 2面 安楽寺報恩講をお勤めする
- 3面 本山報恩講に団体参拝
- 4面 日本仏教史(補足) 鎌倉時代②

編集・発行 安楽寺住職 吉田 和良
 名古屋市瑞穂区井戸田町一の八〇
 電話 〇五二(八四一)二六〇六

明けましておめでと〜うございます

私たちが、仏教について学ぶとき、お釈迦さまの名前が出てまいります。中国の孔子やギリシアのソクラテスとはほぼ同じ時代の、紀元前五世紀に生きられたお釈迦さまは、インドで誕生され、三十五歳でお覚りを開かれたのち、布教伝道の人生を送られました。

お釈迦さまが亡くなられた翌年、お弟子たちが集まり、お釈迦さまにお聞きした教えを編纂

されたのが経典です。日本には六世紀中頃に伝播しました。

浄土真宗の拠りどころとする経典は浄土三部経と言われます。『如是我聞』(わたしはこのようにお聞きしました)から始まる御経です。無量寿経・観無量寿経では、続いて『一時佛・住王舎城・耆闍崛山・』そして阿弥陀経では、『一時佛・在舍衛国・祇樹給孤獨園・』とお釈迦さまが、教えをお説きになった場所と教えを聞かれた「比丘」(修行僧)の方々が述べてあります。

「王舎城」は、インド東部(現在のビハール州)マガタ国ラージヤグリハにあった都で、ビンビサーラ王がお釈迦さまに寄進されたのが、「竹林精舎」と言われました。

次に「舍衛国」は、インド中部・コーサラ国で、その都・シラヴァステイには、寄進されたスタダダ長者(給孤独)とジ

エーダ(祇陀)太子の二人の名前をとって「祇樹給孤獨園精舎」略して「祇園精舎」と呼ばれる僧院があり、その地でお釈迦さまが説法されました。

お釈迦さまは、成道(お覚り)後の四十年に亘って、インド各地に伝道の旅される中で、多くの民衆に教えをお説きになりました。

経典の中に登場される舍利弗・目連・摩訶迦葉そして阿難など多くのお弟子たちが、お釈迦さまの教えを聞信し、教団(サンガ)を支えて、教えを広くお伝えしました。

お釈迦さまが八十歳のとき自ら「涅槃の地」と定められたクシナガラへの伝道の旅は、「涅槃経」に表わされています。涅槃経には、お釈迦さまがお弟子たちに語られた遺訓が多く集められています。

日本は仏教の国と言われます。お釈迦さまの教えに学ぶことは、日本人にとって大変意義あることです。次号より「お釈迦さまの生涯とその教え」の一端をお伝えしたいと思います。



苦行中の釈尊像(ラホール博物館蔵)

仏教(お釈迦さまの教え)に学ぶ

報恩講を勤めました

昨年十一月十三日、報恩講法要をお勤めしました。新型コロナウイルス感染は、不透明な状況が続いていますが、感染防止対策をして午前中の法要を行いました。

当日は、早朝より秋晴れの穏やかな陽気で、皆様の受付を、テントを張った室外で行いま



した。

また本堂内では、ご参詣の皆様の間隔を取り、窓を開放して換気し、入口に検温カメラを設置するなどコロナ感染に気を付けて、全員の皆様に正信偈・念仏和讃のお勤めをご唱和しました。

その後、荒山信師（恵林寺住職）のご法話を お聞きしました。

「報恩講は、親鸞聖人の御命日法要です。私

の父（荒山修師）は、二年前に八十六歳で亡くなり、先日三回忌法要を勤めました。父が生きていたら今回のコロナ禍の状況を、どう受け止めるだろうと思いきこすことがあります。法要は亡き人と出遇い直しをするという大切な意義があると思います。

御文を書かれた蓮如上人は『疫癘の御文』（四帖目九通）で、

『このごろ、たくさんの人々が伝染病にかかって死んでいっています。しかし伝染病のせいで死んだではありません。生まれたときから死ぬことは決まっています。ですから、そんなに深く驚くべきことではありません。』と述べられています。

「私たちは、先行きがみえない時代を生きています。現実不安を抱えておられる方は、大勢おいでになります。他の人の悲しみを知り、悲しみに寄り添う生き方をまっとうしてほしい。私たちは、常に死と共にある人生を生きている。不安な時だからこそ、お念仏の教えを聞いてください」との願いを込めて、蓮如上人は『疫癘の御文』をお書きになられたのだと思います。

「親鸞聖人は、正信偈の最初に『帰命無量寿如来・南無不可思議光』（限りなきいのちをいただいた阿弥陀仏の慈悲のはたらきに頭をさげてください、人が思考や言葉を尽そうとも捉えきれない阿弥陀仏の智慧のはたらきに頭をさげてください）とお述べになられています。

「聖人は、阿弥陀仏のみ教えを聞いて、生きる喜びや悲しみの意味をいただいている」と願われています。

「あなたはこの世に何のために生まれて来たのか、何をなすべきか、何をあとに伝えていくのか、と『賜ったいのち』を何に使わせていただくかを明らかにしてほしいとの願いを込めて正信偈をお書きになられたと思います」と荒山師は、親鸞聖人のおこころについて、篤くお話しされました。

正信偈はいのちの賛歌

本山報恩講

御満座参拝

昨年十一月二十八日、二十八名のご門徒などの皆様と、本山東本願寺報恩講に団体参拝いたしました。例年より早い時刻に安楽寺会館にお集まりいただき、バスで京都に向いました。今年は新型コロナウイルス感染防止のため、乗車時の検温・消毒をしていただき、



御影堂前で記念撮影

車内換気を常時行ない、また座席も密にならないようにご協力いただきました。予定どおり午前九時過ぎに本山に到着し、御影堂前の白州にて写真撮影(写真上)をしてから御影堂に参拝しました。

報恩講最後の法要は、「御満座」と言い、十一月二十一日から八日に亘ってお勤めされた報恩感謝を表わす法要です。今年は、コロナ禍にお勤めするため、椅子席の間隔を空け、御堂衆と参拝席の間にパーティションを設置(写真下)して、お勤めが執り行われました。

途中「坂東曲」(ばんどうぶし)が勤まり、御堂衆が体を力強く前後左右に動かしながら念仏・和讃を繰り返される姿は、参拝の皆様には強い感動を呼びました。

換気のため障子戸を開けていることもあって、参拝席の皆様は少し身体の冷えを感じておられました。法座に出遇えた感動もあり、アツという間の二時間余りの法要でした。

その後、昼食と散策をする京都東山の高台寺にバスで移動しました。秋の紅葉が見ごろの時期でしたので、行楽や買物を楽し



御影堂内の法要中の様子

む多くの観光客が来られていました。

午後三時過ぎ京都を後に帰路に着き、夕方六時には帰って来ました。

今回の安楽寺団体参拝にご参加いただきました皆様には、心よりお礼申し上げます。

来年は、コロナ感染が終息し、安心して参拝ができることを願っております。その節にはご案内致しますので、ご予約いただきますよう、宜しくお願い申し上げます。

仏教豆知識

第四十一回

日本仏教史

補足⑤鎌倉時代

道元(一一〇〇～一一五三)は、はじめ比叡山で仏教を学んだのち、栄西などに師事して禅を修しました。

一二二三年(貞応二年)入宋して長翁如浄について曹洞禅を学び、一二二七年(安貞元年)に帰国して「普勸坐禅儀」を著わしました。中国の如浄から相伝した坐禅こそ、仏祖釈尊の相伝であり、『只管打坐こそ悟りを得る道』と提唱し、曹洞宗設立を宣言しました。偏に坐禅修行すれば、誰でも悟りを得ることが出来ると説いて、釈尊の正法仏教の実践を主張しました。

最初道元は、京都洛南の南深草に道場を建てましたが、旧仏教教団などの迫害があり、越前国(現在の福井県)志比床に永平寺を建立し、伽藍を整備し・清規などを定め、『正法眼蔵』を説いて、衆僧修道生活の確立に力を

を尽くしました。

道元は、王法即仏法の理念のもとに、国家や貴族の俗権に従属した仏教のあり方を否定し、釈尊正伝の仏教の実践(正法禅)の宣揚に努めました。道元の曹洞宗は、朝廷や幕府に接近して「臨済禅」を発展させた栄西とは対照的であり、地方の武士や庶民の間に発展していきました。



道元禅師

ひとこと解説

・只管打坐(しかんたざ) ただひたすらに坐禅をすること。道元は、坐禅修行は男女貴賤の別なく出来るものであると説いた

・正法眼蔵(しょうぼうげんぞう) 道元が弟子のために仏法の真髓を書いた書。九十五巻という大冊で、自らの禅風を明らかにしている

「袖振り合うも他生の縁」との諺があります。人と人との出会い・関わりは単なる偶然ではなく、過去世及び未来世を結び繋ぐような宿縁がありますという言葉です。▼毎年其の年の健康としあわせを願って神社や寺に初詣にお出かけされる皆様も大勢ありますが、コロナ禍の今年はどうでしたでしょうか。▼「三密は避けましょう」「人混みは控え、家庭で過ごしませう」と様変わりです。マスク・消毒・換気などの生活様式は定着してきましたと思いますが、他人との関わりには戸惑われておられる皆様も少なからずおおいでになると思います。皆様の身近に心おきなくお話しできる方がありましたら、まずは連絡をとってお互いの消息を伝え合うなど、他人との関わりを持って毎日を過ごしていただきたいと思います。▼仏教は、なりよりも平和でこころ豊かな日々を暮らすための教えです。先人の方々がお伝えくださった仏さまのお言葉に静かに耳を傾ける生活を始めていただきますようこころよりお願い申し上げます。本年も宜しくお願いいたします。